

## 賀川豊彦の「労力全酬」論

田村 剛

賀川の膨大な著作の中に、『主観経済の原理』（大正9年6月発行 福永書店 X+pp.398）という彼の経済観を展開した論稿がある。これは大部な上に、彼の著作の中でも難解なものの一つといわれるものである。

そこでは、商品の価値を規定するのは労働（「労力」）であるこ

と、「資本主義の経済」における「搾取」や「階級闘争」は当然のこととして前提され、「資本家の利己心」からくる「剰余価値」、「利潤」のもたらす「危険」を回避するには、「大資本の社会化即公有」が必要であると指摘されている。このように、賀川の経済理論の筋道はマルクスの経済理論に多くを負っている。

賀川のマルクス理解の当否は別として、彼はマルクスの一般範式を問題にして「一次方程式の常数的函数で機械的に解釈出来たら、生命そのものも、唯物史観的運命説で解釈できたと思うのは大いなる誤解であって、わたくしがマルクスの労働哲学に反対するのはその理由である」と批判する。つまり、「『全世界を得るともその生命を失はば何の益あらんや』とも云はるゝ生命が、その日生きて行けるだけの飯代の価格で値づけられる」とする賃金の「再生産費説」を否定する。賀川のいう「主観」を理解するには、労働力にかんする彼の「倫理的」、「宗教的」、「芸術的」等の諸側面の理解が不可欠だが、それは経済学の範疇を越える。ただし、彼がマルクスの一般範式について「どうせ、経済学も人間の行動であるから、心理的函数を加え無くして、どうして、完全な方程式が出来てであろうか？」と問題にしているが、これなどは有効函数に関する賀川独特の見解ないし解釈であったのかもしれない。

さて、「多くの価値は需要供給によって定められて居る。然し是

れは客観の価値で有って、主観的に云えば、価値は矢張り労力が決定して居るのである」。しかし、「今日の処では、資本家は一種の保険業のようなことをして居て、労働者の賃金は先に支払ってしまつて、そして、労働者の生活を保証し製品が出来上がって損をしてもそれは黙っていると云うのが、資本家の保険的要素となつて居る。その代わり、利得が有つてもそれは保険屋の利益とするというのが今日の資本主義経済学の保険的要素である」。そこで、労働者がこの保険屋の機能を担うとき、労働の経済的貢献に等しい賃金すなわち「労力全酬」が実現する。つまり、「保険は、矢張り、労働者が多数を占める社会に於ける相互扶助に待つより仕方が無い。そして労働者が自己の相互扶助によって生活と社会秩序の保険を附する様になると、そのとき初めて労力価値説は十分に認められてくるのである」。

ここにも、賀川の世界観の核である生命体の「相互扶助」作用が登場していることに注目したい。

本文は、賀川の経済にかんする論稿の第1章を中心に彼の労働観の一部を概観したにすぎない。この著作は、彼が32歳の時に出版され、同年10月には『死戦をこえて』を發表している。

(たむら とう)

所員、経済学部教授)